第166回　日文研フォーラム

■

明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響

―家族改革をめぐって―

Naruse Jinzo's Family Reform Movement and Its Influence in Asia

■

陳　暉
CHEN Hui

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長　山折　哲雄

● テーマ ●

明治教育家 成瀬仁蔵の アジアへの影響

―家族改革をめぐって―

Naruse Jinzo's Family Reform Movement and Its Influence in Asia

● 発表者 ●

陳　暉
CHEN Hui

中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授
Professor, Institute of Asia-Pacific Studies, Chinese Academy of Social Sciences
国際日本文化研究センター外国人研究員
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

2003年11月11日（火）

発表者紹介

陳　暉
CHEN Hui

中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授
Professor, Institute of Asia-Pacific Studies, Chinese Academy of Social Sciences
国際日本文化研究センター外国人研究員
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略歴

1981年7月　歴史学修士（北京大学）
1981年9月　中国社会科学院日本研究所　助理研究員
1987年9月　中国社会科学院日本研究所　副研究員
1991年5月～中国社会科学院亜太日本研究所　研究員教授

著書・論文等

「戦争体験と女性作家」『RIM』2巻2号　1999年
『近代化と中国女性の生き方』城西国際大学国際教育文化センター　1998年
（共著　賀嘉）『日中文化交流史叢書⑤民俗』大修館　1997年
「中国・日本家族」『中国婦女』　1994年
『教育・社会・人間』東方出版社　1991年

1　はじめに

ただいまご紹介に預かりました陳暉でございます。あいにく雨降りとなりましたが、お集まりいただいた皆さんに厚くお礼申し上げます。

私がなぜ明治教育家成瀬仁蔵をテーマにしたかというと、そのきっかけは二つあります。一つは明治期の日本文化の中国に対して及ぼした影響が大きいからです。とくに中国では先進知識人が日本を通じて西洋文明を吸収したのが特徴です。明治期から日本に留学した中国人は少なくありません。とりわけ日清戦争以後、有志の青年が日本に赴いて留学することは風潮となりました。留学生、修業生を合わせてのべ三万人もいました。[1] 一八九六年～一九三七年の四二年間、留学生の人数は八千人で遊学、研修、修業生を含めて五万人を越えていました。精確な統計によると、（一九一三年、一九二四年、一九二五年の数字が欠けているため、不完全なものですが）、総人数は一一三、四〇〇人です。[2]

多くの人々が東遊日記を書いて日本人の性格、社会制度、家族の状況、衣食住について紹介し、また留学生の中から多くの革命家、社会改造家が現れました。本論ではその中の一人、著名な画家であり、中国国民党の長老、国民党の最初の女性党員で、一九〇

三年から日本女子大学校に留学した何香凝をご紹介いたします。そして何香凝と校長の成瀬仁蔵の接点を探ります。明治期の成瀬仁蔵の思想は中国の近代化に一定の影響が見られます。

もう一つのきっかけは、私が近代化と家族変遷の領域で研究しているからです。私の国際日本文化研究センターでの研究テーマは「近代化と東アジア家族の変遷」ですが、とくに中国と日本の家族像の変遷に関心を持っています。二〇世紀の留学のブームが家族の改革に何か影響があったのかどうかを調べると、何香凝の留学という意味深いケースが見つかりました。家族改革の歴史的道程を振り返って見たときに歴史を動かす人物を見落としてはなりません。その時、歴史を動かした、と言える人物論は一般論より遥かに有力です。近代化への道程は家族の変遷、女性の地位の向上とは必ずしも一致しているとは言えません。その時々の逆流、逆コースに抵抗し、優れた貢献をしたのは日本では成瀬仁蔵、中国では何香凝、宋慶齢、鄧穎超、李徳全などの名が上げられます。

今日は以上のことについてお話を進めていきたいと思います。

歴史を動かすものは人間であります。個人の事跡が明らかにされない歴史の叙述は完全ではあり得ないのです。明治教育家の成瀬仁蔵の一生を追って見ると、彼のアジアへの影響、とくに家族改革の面での功績が大きいという点が顕著であります。明治三大教

育家のうち、新島襄、福沢諭吉は日本国内で優れた業績があり、一方アジアの女性教育のために貢献したのは成瀬仁蔵だけです。

これまでの先行研究では青木生子の『いまを生きる成瀬仁蔵』、中嶌邦の『成瀬仁蔵』などの図書や論文がありますが、すべて成瀬仁蔵の日本国内での活動を評価するものであります。これら先行研究の中では成瀬仁蔵の中国への影響についてはほとんど論じられていません。中嶌は「中国語訳の（成瀬の）『女子教育論』は中国の女性解放にも何らかの影響を与える書となったと思われる」と指摘していますが、本稿は新しい資料の発掘に基づき、成瀬仁蔵とその教え子であり、中国近代女性運動の先駆者、国民党の長老、同盟会の最初の女性会員であった何香凝との接点を探り、近代化と東アジア家族改革の像を提起するものです。

2　成瀬仁蔵の生涯

成瀬仁蔵は一八五八年（安政五）六月二三日に、現在の山口県山口市吉敷に士族成瀬小左衛門、同歌子の長男として生まれました。吉敷は長州藩主の一族吉敷毛利家の領地であり、成瀬家は代々吉敷毛利家の祐筆をつとめ、漢学の素養深く、教育家の家として

知られていました。幼少のころは幕末の動乱を身近に見ながら、藩校憲章館に学び、長じては、明治維新の変革によって、禄を失った父の家塾を手伝い、山口県の教員養成所に学び、小学校長などをつとめました。この間に七歳で母を失い、十六歳のときに弟と父を失い、死に向き合う体験をもちます。

成瀬は母の死と宗教心のおこりについてその後も触れており、晩年、「予は、七つの時自分の一番慕つて居た母を失ひ、其の母にもう一度逢ひたいと言う事が何よりの希望であつた、これが予の宗教心の起つた初めである」[3]、と述べています。成瀬は信仰に生きることを決意し大阪の沢山保羅牧師を訪ねました。

キリスト教との出会い

同郷の沢山保羅は一八七二年（明治五）アメリカに渡り五年間滞在し、プロテスタント教会の外国人受洗者の第一号であったといいます。のちに教会費自給論を主張します。

日本の近代社会の展開の中で、キリスト教徒となったり、牧師として活動する人々の多くは、維新の変革に際しての佐幕派やその変革に参加しにくかった藩の出身者であったといわれるが、沢山保羅は信仰ゆえの例外者となった。帰国した沢山はアメリ

カン・ボードの宣教活動の一つの場であった大阪で日本組合教会に属してキリスト教をひろめながら、医療活動を行う松村診察所で働きはじめた。次第に新しい公会（後に教会と称する）の設立が話題となり、その宣教の核となる人物として、沢山保羅が周辺の一致した推奨を受けるようになった。[4]

成瀬は一八七七年（明治十）十一月三日浪花公会において澤山によって洗礼を受けました。彼は外国宣教師の間で「聖書を持つ青年」と云われるほど信仰に熱心でありました。[5]

成瀬が従事するキリスト教女子教育

アジアにおける近代教育体制の成立過程で、キリスト教はプロテスタントを中心に宣教が始められますが、同時に女子教育は女性を通して日本の家庭をキリスト教化する手段として重視され、特にプロテスタント系の宣教は女学校を設置することに熱意を示し、東京を始めいくつかの都市に開校されました。こうした宣教師による学校は、他の私立学校の開校をも促して女子教育の推進に重要な役割を果しました。一八七八年（明治十一）一月発足した梅花女学校がその先鞭となったといえるでしょう。学校設立の背景と

しては梅本町公会（後の大阪教会）と浪花公会（後の浪花教会）によって、前年の明治十年十月組合教会の信徒懇親会がひらかれ、成瀬もそれに加わり、そこで女学校の設立の議が出て会員の賛成を得たのでした。

日本では明治十年代、女子教育の飛躍的な発展が見られました。女学校教育に携わることとなって成瀬仁蔵の女性観も大きく変化しました。かつての「男尊女卑」とする儒教的な女性観から、神の前に人としての個、男性と女性の間に差別のない平等な存在であることを認識させられることとなりました。

その頃であろうか、聖書の言葉「誰か賢き女を見出すことを得ん、その価は真珠よりも貴し」（箴言三一の十）が成瀬の胸に啓示の如く響いた。[6]

『婦女子の職務』の出版

一八八一年（明治十四）九月、成瀬仁蔵は処女作『婦女子の職務』を発刊しました。その中で「家は夫婦の二本柱」として男女を同等にとらえ、一生を決める婚姻に七項目の注意点を挙げ、慎重に決定することを促しています。その場合、家は「国の基」であるが、「政府は家のため」にあるとし国家あっての家ではないと把えています。そして

女性の真価を知らず、用いなければ国家的損失となるであろうともいい、文明開化期の教育普及が女性にも広く及ぶことを強く求めています。[7]

この本の意義について、中嶌は次のように指摘しています。

成瀬の女子教育論も当時のキリスト教女性教育論と同様に、家庭内における女性の役割、特に子女の教育それを重視するものであるが、ここには一人の人としてのあり方が基本となり、夫との関係も同等、社会での活動の役割も考えられ、女性の立場によりそって論じられている点は注目してよいであろう。[8]

アメリカ留学へ

一八九〇年十二月三一日、成瀬はサンフランシスコに上陸しました。一月十一日にはボストンに着き、牧師レビットに迎えられ、その家に落ち着きました。レビット夫妻には七人の子供があり、成瀬を迎え入れるために「一名の僕婢をも置かず」、また「家族は個人としても自立しながら、それぞれに家事を分担してよく働くこと、秩序のある家庭」であり、成瀬はその助け合い支えあう家庭生活に感心しました。[9]

アンドーバー神学校に通い始めた成瀬は、翌年の六月末まで籍をおいたと見られます

が、この間の『日記』などから、これからの一生の目的、自らの使命、天職について沈思している様子が窺われます。

〈わが生涯の目的〉　わが生涯の目的はわが日本全体の家庭を通じて、即ち Convert（変換）して日本社会を救うにありとす。各々の家に天国を来たすにあり。是れ吾が天職と信ず。これを遂げる準備として女子教育、社会改良、結社、貧民救助、著書、新聞雑誌発行、伝道、男子青年の教導、また之に関する著書・演説等に従事す可し（一八九二年一月一四日）

成瀬にとって新しい社会の核となるものは家庭であり、これまでの女子中等教育の経験とアメリカで体験し考察を重ねてきた高度な教養をもった女性がここに育つことにより、日本社会が根底から変わることを願ったのであります。近代日本の家庭の再構築は長期的展望を要することでもありました。[10]

彼はアメリカで社会学を勉強し、また英語で『澤山保羅伝』を書いて、日米の交流にも貢献しました。

一八七七年にアメリカで女子高等教育を支持するマサチユセッツ協会が生まれて会員を募り、奨学金を出したり、女性に対しての社会問題や教育問題の講演会をおこなっています。このような動きは社会的な女性高等教育へのニーズを高めたと言えるでしょう。そしてブリンマー、ウエルズレー、スミス、バーナード、ラドクリフ等に続き、その後も著名な女子大学が設立されて、女性の高等教育の上昇期にありました。成瀬のウエルズレー女子大学への訪問については、『女学雑誌』（二六七、二六九号）に掲載された「ウエレズレー女子大学観察略記」によって報告されています。[11]

米国滞在の満三年間は成瀬にとって今後の方向を決める重要な時期でありました。いわば日本社会を客観視し、日本社会の改良を実現するための方向を探るものであったのです。

次に成瀬が求めていた社会の近代化、特に欧米の家族事情について簡単に紹介します。

3　近代化と家族改革の流れ

近代化とはなにか、富永社会学の定義によれば、四つのサブカテゴリーを考えることができる、とされます。

（1）技術的―経済的近代化　技術的―経済的近代化は「産業化」であって、これはエネルギー使用が人力・畜力から機械力に移行するメカニゼーション（産業革命）に始まり、高度産業化といわれるオートメーション（自動化）を経て、ポスト工業化といわれる情報化・サービス産業化にまでいたる諸発展段階を含む。

（2）政治的近代化　政治的近代化とは、「民主化」を意味する。これは、中世封建制から近代国民国家への移行にはじまり、封建的束縛と王の専制からの離脱、人民主権、議会制民主主義の確立、男子普通選挙権、そして婦人参政権にまでいたる政治変動をさすものである。……日本は、明治維新において、多数の封建制小国家を統合して国民国家へと移行した点でヨーロッパと同じであるが、明治憲法は天皇主権を規定して人民主権をとらず、大正デモクラシーは明治憲法の枠内での民主化にとどまった。日本における政治的近代化の本格的な実現は、第二次大戦後のことである。

（3）社会的近代化……［富永は］これを、家父長制家族の解体と核家族化、氏族・親族集団・村落共同体などの基礎社会（血縁と地縁のゲマインシャフト）の解体と目的集団（ゲゼルシャフト）の優位、都市人口の膨張と都市的社会関係・都市的生活様式・都市的社会意識の拡大を意味する都市化、初等・中等・高等の順に教育が大

衆化していく過程としての教育の普及、身分制の解体、社会階層構造の平準化と社会移動による機会の平等化、などを総称する語として用いている。その理由は、家族、親族、村落、都市、社会階層などは、私が「狭義の社会」（または準社会）と呼んでいるものであるからである。これらは、「自由と平等の実現」として括ることができるであろう。なぜなら、家父長制家族の解体、親族集団や村落共同体の解体などは、血縁、地縁のゲマインシャフトによる拘束からの自由を意味するし、都市的社会関係や都市的生活様式などは人びとの生活を自由にするし、教育の普及、身分制の解体、社会階層の平準化と社会移動などは、人びとを平等にするからである。[12]

笠谷和比古によると、血縁と地縁のゲマインシャフトの解体と目的集団の優位が日本では徳川時代に行われました。農民・町人といった非武士身分の人間にも武家の世界に参入して活躍できる機会を与えてくれるもので、徳川時代の武家組織は、非武士身分のものの血と能力を不断に導入していく回路を設けていたことを意味しているのです（笠谷和比古『武士道の思想』ＮＨＫ人間講座より）。つまり社会階層移動は近代化の条件ですが、日本では徳川時代にすでに備えていました。

（4）文化的近代化　文化的近代化というのは、科学的思考の普及、迷信や呪術からの離脱、意識における合理化と理知化など、合理主義と知性主義の広範な普及の諸過程を、総称するものである。[13]

近代化を以上のようなサブカテゴリーに分けてみると、西洋においては、ルネッサンスと宗教改革にはじまる文化的近代化が最もはやく、氏族・親族集団・村落共同体など血縁・地縁のゲマインシャフトの解体にはじまる社会的近代化がこれに次ぎ、市民革命にはじまる政治的近代化が三番目で、産業革命にはじまる経済的近代化が最も遅かった、という事実に気がつくであろう。これに対して、日本を筆頭とする非西洋諸国の近代化においては、西洋と反対に経済的近代化が最初に来て、政治的近代化がそれに次ぎ、社会的・文化的近代化は最も遅かった。これは、それら非西洋諸国の近代化が、西洋からの文化伝播によるインパクトから出発して、軍事力・経済力において西洋からの遅れを取り戻すことに全力をあげ、精神的要素の近代化はあとまわしにしたことの結果であった、といえるであろう。[14]

十八世紀末ごろからイギリスでは、職を求めて都市に流入した人びとは、一家全員が

賃金労働者となって劣悪な労働条件の下で就労します。そこでは、従来の労働現場における家族が単位となった就労が失われるのです。この挙家離村型の労働力は不況などの際にも「帰るべき場所」を持たず、都市にスラムを形成します。[15]

これに対して東アジアの工業化は出稼ぎ型です。労働力の「型」に注目するならば、イギリスがエンクロージャによる挙家離村型の帰るべき家を持たない労働者の群れを前提としたのに対して、日本はいわゆる農村を基盤としての出稼ぎ型です。自分が帰属する帰るべき場所を農村に持ちつつ、近代産業の労働力となるのです。これは何も日本だけの現象ではありません。東アジア全体がほとんど同じです。後発近代化で広大な農村が残される場合、大規模なプランテーション農業などで、農村が雇用吸収力を失ってしまう場合を除けば、産業化を支える労働力は実家を農村に持ち、自らもそこにアイデンティファイしつつ、一種の出稼ぎのような形で農村を析出します。[16]

富永社会学の近代化のサブカテゴリーの（4）に指摘されているように、西洋では宗教改革に始まる文化の近代化が最もはやく、とくに都市に挙家離村型の家族に新しい家族の規範をもたらしました。

ヴィクトリア女王の治世（一八三七―一九〇一）に特定の家庭規範が成立します。それは二つの異なる源泉を持ち、一つはピューリタニズムや福音主義（Evangelicalism）

がもとになった勤勉と愛に満ちた家庭像、今ひとつは上流階級を源泉とする有閑階級の女性像です。[17]

ピューリタニズムおよびそれを基礎にする福音主義の家庭観ですが、ピューリタニズムは家族集団を信仰生活の最小単位として重視して、しかも性衝動を（男性の）人間性の一部として認め、当事者の愛と魅力に基づく結婚を奨励しました。そこに生まれるのは愛と信仰にあふれた家庭のイメージです。[18]これらの家族の改革は宗教観に基づくものでありますが、挙家離村型の家族は信仰生活を通じて容易に家族改革をすることができました。しかし、アジアでは農村を基盤としての出稼ぎ型です。自分が帰属する帰るべき場所を農村に持ちつつ、近代産業労働力となるのです。家族改革は容易なものではありません。

アメリカはイギリスの植民地であった関係上、ピューリタニズムの価値観を通じてイギリスの女性規範、家庭規範を直接輸入しており、アメリカ近代の主婦はその成立過程こそイギリスと異なるものの、それを支えた規範は基本的にはイギリスと共通であります。とくに夫婦愛の比重は他の文化圏に比べて高いことにありました。イギリスの「男＝生産労働、女＝再生産労働」という役割区分をやぶって、即ち男女の空間的な隔離・配分はさほど強くなく、女性の家の外への進出が徐々に肯定されるようになりまし

た。

本論の成瀬仁蔵がアメリカ滞在中にみたアメリカ家族像は以上のような背景があります。成瀬仁蔵の改革しようとした日本の家族の実態は「この家族を統括するのは夫である。この家族は近代国家の単位とされる」[19]

また、山田昌弘は次のように指摘しています。

●明治時代政府主導で、イエ制度が形成され、『生活の責任単位』が上から強制的に押しつけられた。イエ制度こそは前近代の遺物ではなく、日本的な近代家族の一つのあり方だと思われる。

●家族の中に、人格や愛情を閉じこめ、家族に再生産責任を負わせることによってのみ、資本主義生産が発展する。その事実を知っていたと思われる明治政府は情緒的満足の代わりに『家イデオロギー』をおいて『イエ』の中に生活の責任の単位を固定化させたのである。[20]

つまり江戸時代の女性は一定の自由度がありました。けれども、ナポレオン法典[21]の導入と明治三一年に成立した明治民法（ドイツ式編制法）によって、家族国家理念を受け

入れたものであり、女性への束縛が強化されました。けっしてデュルケムのいう婚姻家族たる近代家族ではなく、夫婦の人格的平等などあり得ないのです。

4　成瀬仁蔵と中国―教え子何香凝の中国での活動

1）日本女子大学校の創立

一八九〇年（明治二三）教育勅語が発布され、復古的な風潮にのった女性論が横行し、女子教育の必要性に水をさすものがありました。布川清司は明治一七年から二九年には女性解放の倫理がそれまでの開明的思想から反動期となるといいます。[22]

成瀬はこうした事態に応えて一八九六年二月、『女子教育』という書を青木嵩山堂から出版し、日本の女性高等教育の方針を打ち出して、

第一、女子を人として教育すること

第二、女子を婦人として教育すること

第三、女子を国民として教育すること是れなり、

と結んでいます。本書は楊廷棟、周祖同により中国語にも翻訳され、『女子教育論』として上海作新社より一九〇二年に出版されました。

人としての教育を第一においたことは、翌一八九七年三月の日本女子大学校第一回創立披露会での講演「女子教育振起策」（『女子教育談』所収）のなかで、この三つの区別や順序を誤ってはならないと言っており、人としての教育を基本にしていたことが分かります。「女子と小人は養い難し」といった男尊女卑の思想や行為が一般的に見られる中で、当時は人と言えば男性を指していました。そこで人としての教育を男女区別なく主張したことは注目されるでしょう。[23] また国民として教育することを最後において、教育勅語や家族国家観とは一線を画しました。

一九〇一年（明治三四）四月二〇日、日本女子大学校は現在の東京都文京区目白の地に創設されました。その開校のいきさつは中国上海の『点石斎画報』にも次のように報じられました。

蘇報によれば、日本では今まで女子大学はなかった。今成瀬仁蔵という人が次のように指摘した。日本では文明開化男女同権を提唱し、女子大学校を興さないと人材は育てられない。男尊女卑は同権の義に背くものである。募金活動をして三〇〇人の寄付を得、大坂の城南に五〇〇〇坪あまりの土地が買収された（明治三十二年五月二十二日）。後援者は伊藤侯爵、岩崎男爵、大山侯爵、大隈伯爵、松方伯爵、近衛公爵、

各爵夫人、住友吉佐衛門、など十七名また、賛成者は多数……

2）何香凝のパーソナリティーの形成

何香凝（一八七八―一九七二）は、政治運動家、画家、中国国民党長老として広く知られ、中華民族に模範をしめす、と毛沢東に評価された人物です。[24]

何香凝は一八七八年六月二七日、香港の資産家の家庭に生まれ、育てられました。何香凝の出身地は広東省南海県綿村郷で、婚約者の廖仲凱の原籍は広東省帰善県窰前村、アメリカ、サンフランシスコ生まれの華僑で、結婚相手の条件は天足（纏足しない自然の足）であることとしていたため、二人は「天足縁」と称えられて一八九七年旧式結婚方式で結婚しました。当時の清政府は腐敗し無能状態でありました。主権を失い国を辱めることをたくさん行いました。何香凝、廖仲凱も怒りを覚えました。日清戦争以後、有志の青年が日本へ留学することは一時風潮になっておりました。廖仲凱も日本へ留学するつもりでした。彼の父はアメリカで客死し、兄は清政府の外交官に就任していました。兄は廖仲凱の留学に資金を出そうとしませんでした。金が足りなくて彼は「国家がこんな危険に曝され、われわれは黙っていられようか。日本の留学界は元気溌剌とし、有志者は雲集している。私も日本にわたって留学したいがただ学費がなくて困っている」

とよく嘆きました。そして「将来、清王朝は必ず滅亡し、新しい人間に取って代わられるに違いない。両親がもうなくなって、兄は満清の官僚だから学費を出してくれない。もし一千元あればいけるけれど」。

廖仲凱の志をまっとうさせるために何香凝は実家からもらった真珠、宝石、貴重品を売りました。すでに慣れてのんびりした裕福な生活をすてて、夫は一九〇三年一月日本へむかいました。後を追って彼女は四月日本に到着しました。

何香凝が東京に着いたとき、夫は神田区の松本亀次郎の開設した日本語学校に入学していました。二人は東京の早稲田付近の貸家を借りました。このアパートは「覚盧」といい関乾甫、蕭友梅など同じ広東人の留学生が住んでいました。

はじめは何香凝も日本語学校で日本語を勉強しました。なかなか進歩できないため、人の紹介で東京目白の日本女子大学校に入学して寄宿舎に引っ越し、校長の成瀬仁蔵の世話になって、宿舎の管理人夫婦に日本語を教えてもらいました。その後一九〇八年まで、何香凝は同校と縁がありました。

日本女子大学の久保田文次教授は、何香凝が成瀬の『女子教育』を読んで、日本女子大学校の創立を知って入学したのだと指摘しています。（中国テレビ番組『二〇世紀中国女性史』より）

一九六一年、何香凝の回想録によれば、「当時私の日本語の程度が低いので、授業を完全に聞き取れなかった。当時の日本女子大学校の校長の成瀬仁蔵は学校の寮の管理人夫婦と相談し、私に日本語を教えてくれた。成瀬仁蔵は私の学習に大変関心を寄せ、一方ならぬ世話になった。私はいまになっても感謝の気持ちを抱いている」[25]

何香凝は小さいとき反抗心の強い子供で、母が彼女に纏足させましたが何度も纏足をほどいたため、母は諦めるより仕方がなかったのです。また母方の親類が大平天国の乱に参加したことがあるので、小さいときから満清王朝を覆す話を聞いていました。彼女も太平天国の女性戦士のように刀を腰に騎馬で町を纏足のまま歩きたいと思っていました。

彼女は幼少期に女書館（私塾）での二年間の伝統的な儒学思想教育しか受けさせてもらえなかったので、結婚前後の活動範囲は家を超えたことがなかったのです。維新後の資本主義の日本社会で元気溌剌とした日本女子大生のなかで集団生活をし、二四歳までずっと憧れていた学生生活をやっと実現することができたのでした。

人として国民として

この時期の彼女の思想活動は「わが同胞姉妹に訴える」という文章から窺えます。こ

の文章は日本に着いてから二、三カ月後に書いたもので、日本女子大学校での見聞を基礎にして書いたものであります。とくに人として国民としての認識が深まったといえます。七百字の文章は中国婦女運動史上、早期の有数の文章の一つに数えられます。

嗚呼！　国のことは聞いてはいけない！　わが国民はまぬけでありながら亡国を待つしかないのか？　それとも意気込んで向上を求めて、英雄になって白人と競争するか？　明末清初の思想家、顧炎武（亭林）は「天下の興亡は、匹夫にも責任あり」と述べている。これはもとより男子の義務であるが、男子と同じように耳目を持ち、同じ身体を持っている女性は非人類であるのであろうか。同じ人類であれば、天下の興亡を我々二億の女性同胞はどうして見過ごすことができようか？　巣がひっくり返れば割れない卵はない。薪の上にいれば幸せなんか言えようか。（中略）西洋の諺は言う、『女子は文明の生産者である』また『女性は社会の母である』、だから女性は社会の中で最も重要な人であり、責任のもっとも重要な人である。こんな重い責任を持とうとする人は終日女性の居間にいて大門も出ない人だとすれば、だめである。重大な責任に堪えないからである。わが姉妹よ、古い習慣をなくし、新しい知識を勉学し、外国に遊学し、自分になる、一人前になる。責任を放棄し、座して死を待つ。香凝は

学問が浅く、こんな大きなことを言うべきではないが、個人がなければ、社会があるはずはない。私は皆さんとお互いに励ましあいましょう[26]

女性として

何香凝は成瀬の『女子教育』の中国語訳本を何度も読みました。その中の「依頼心多き人民の増加する度に応じて国家は益々衰微に傾くもの」や「一生に一業を成就し、以て自己の幸福を増し、社会の公益を図る」などの教えに心を打たれました。それを自分の実践に移しました。

彼女は一九〇三年九月、神田神保町の中国留学生会館で孫文と出会い、革命活動に参加しました。一九〇三年冬、何香凝は日本女子大の寄宿舎を離れて、東京牛込区の貸家に引っ越しました。革命派の学生は東京青山にある大森運動場で射撃練習などの軍事訓練を行っており、女中を雇って家事をさせたら警察に知られる恐れがあるので、五、六年の間それらの学生のために何香凝はご飯を炊くなど家事労働をしていました。

自伝の一章からその当時の様子を見ます。

中国では――特に数十年前――親に可愛がられるお嬢さんたちは裕福な家庭で生活

していて、炊事なんかしないのである。それは使用人の仕事である。私も例外ではない。私の父母は私を宝物と見て、家庭の経済状況もよくて、家庭では台所とは無縁である。廖仲凱先生と結婚してから食事の仕度も使用人に任せる（実家から二人の使用人に来てもらった）。日本に留学してからある使命感を覚え、自らお嬢さんの高い身分を捨てて、雇った日本の女中からご飯の仕度を学んだ。このことは記念すべきことだと思われる。

革命活動のために、神田で七、八室の部屋の貸家（当時二五円）を借りて、学校に通いながら、革命派留学生のために食事の仕度をしなければならない。そのとき、東京ではガス、電気、水道がなかった、私はこの家事は中国革命のためだと思って、どんなつらい目にあっても堪えて毎日愉快であった。[27]

時がたつのは早いものである。これはもう三五年前の物語である。私の個人生活について、親の前でお嬢さんであり、社会に出て労働者であり、家庭内で食事の仕度や家事をやれるし、台所をでたら、政治活動に参加できる。うまい料理も賞味できるが、粗末な料理もかまわない。のんびりした生活もすることができるが、苦難な日にも耐えることができる。（中略）、一般の女性は女性としてどうしたらいいか。生活の技能を学んだほうがいいし、苦しみやつらさを耐え忍ぶ心構えが必要である。国家、社会

のことに関心を持つ、自分のことを他人に任せないでちゃんと自立したほうがいい。国家が女性に対する態度はこうすべきだ。男女平等を原則とし、女性も男性と同じように教育を受ける権利があり、各種の職業に就き、社会活動に参加する能力を持たなければならない。女性を台所や家庭に閉じこめるようなことは数十年前でも不可能である。私自身はよい例である。中国革命は女性の参加がなくていいわけがない。しかし今になっても、真の平等的な待遇を勝ち取ることができず、本当に申しわけがたたない。将来国民憲法を制定する人は女性同胞全体が得るべき利益――くわしく男女一律平等の条文をなおざりにしないでください。[28]

このように何香凝は人として、女性として国民としての立派な人格形成の手本であり、成瀬の教育思想を徹底的に実現した教え子であります。

3）三民主義の一環としての何香凝の家族改革論

日本の近代化は上からの近代化であるため、成瀬仁蔵の家族改革は上層、中産階級の家庭の範囲内に行われる制限がありました。成瀬は日本女子大の卒業生の同窓会の桜楓会が出版した『家庭週報』を通じて社会への影響を拡大していました。中国では、清政

府を打倒して、孫文の「連ソ」、「容共」、「労農扶助」の方針の下で、何香凝の労農階級の女性を解放する実践は可能となりました。

何香凝の家族観について紹介します。一九〇七年日本留学中の何香凝は一時アナーキズムの家族解体論に賛成しました。一九〇七年八月三一日東京で出版された中国語のアナーキズムの雑誌『天義』に寄付金六元を贈りました。

辛亥革命後の一九一二年二月十三日、孫文の革命勢力と清王朝の残留勢力との闘争結果、孫文は辞任に追い込まれ、二月十五日、新政府側を代表した袁世凱が臨時参議院で臨時大総統に推挙されました。袁世凱が中華民国大総統の座についた後、女性運動派は弾圧されました。袁世凱は婦人団体を解散させ、女子法政学校を廃止し、法律上の女子の自由権利を奪い取りました。社会風俗においては烈女を表彰し、女性にだけ貞操を要求しました。

一九一三年八月、孫文の二次革命が失敗し、何香凝は夫と一緒に日本に亡命しました。一九一四年五月、三六歳の何香凝は孫文の中華革命党に加入し、その年、日本留学中の中国人学生に袁世凱反対の連絡、宣伝の仕事をしていました。一九一六年四月まで日本にいましたが、そのとき多くの日本の友人、宮崎滔天、山田良政、犬養毅などの人々と付き合っていました。

一九一九年から一九二〇年まで中国では五四運動の影響として、男女交際の自由、教育の男女平等、封建的婚姻観の打破、家族改革の思想的準備が整えられました。何香凝は一九一八年二月広東軍政府のために日本に赴いて公債の発行や日本の支持を求める政治活動に熱心に参加していました。そして五四運動を支持し、東京で留学生集会を開き応援しました。

反帝国主義、反軍閥を掲げた国民革命は一九二四年の孫文による国民党改組と国共合作によって始まりました。この時期から、何香凝は女性運動に本格的に取り組むようになりました。女性解放運動を積極的に推進し、女性運動の側面から政治に参画するようになったのです。国民党に初めて婦人部が設けられたのは彼女の尽力によるものです。初代婦人部長となった何香凝は中国国民革命の成功は人口の半分を占める婦人の自覚如何にかかっていると考えていましたから、共産党員の婦人らとも手をつないで順次婦人解放のために努力していきました。

何香凝は、国民党の綱領のなかに「男女平等」の一文を入れるよう主張しました。一九二四年一月、国民党第一次全国代表大会が広州で開かれました。この大会では「法律上、経済上、教育上、社会上の男女平等の原則を確認し、女性権利の発展を図ること」という提案が採択され、大会の宣言に盛り込まれました。孫文も新三民主義の民権主義

が男女同権を包括していることをはっきりと説明しました。

何香凝はまた中国初の国際婦人デー記念集会開催のため尽力しました。一九二四年三月八日、広州で初めての婦人デーの記念活動がありました。三月三日何香凝が広州で講演会を開き、廖仲凱が招かれ講演しました。廖仲凱は「社会、国家の諸問題を解決するために、婦女問題を併せて解決しなければならない。婦女問題を解決するために、自らの力を求めなければ成らない、他人の力は頼りにならない」「中国の男女不平等は他のどの国よりもひどい、たとえば多妻制不平等、労働賃金の不平等、教育の不平等、など他の国には及ばない[29]」と講演しました。

国民党第一次全国代表大会後、国民党中央執行委員会に婦女部が設立され、上海、北京、漢口の特別区執行部にも婦女部が置かれました。一九二四年十月国民党中央婦女部は女性運動を発展させるため、婦女運動委員会を設立しました。会員は三〇〇人でした。国民党婦女部の設立後、中国の女性運動は組織的、系統的な活動を開始しました。

一九二六年一月一日、国民党第二回全国代表大会が広州で開催されました。この会議に出席した女性代表は一六人でした。何香凝、宋慶齢、鄧潁超の三人は婦女運動報告審査委員会を作り、広く意見を求めて討論を繰り返した後に大会に「婦女運動決議案」を提出しました。「決議案」はこれからの女性運動の中で実施すべきものとして次の項目

を提出しました。

甲　法律部門

一　男女平等の法律を制定する

二　女性が財産の相続権を持つことを規定する

三　人身売買をきびしく禁止する

四　結婚、離婚の完全自由の原則に基づいて、婚姻法を制定する

五　抑圧されて結婚から逃げ出した女性を保護する

六　同一労働、同一賃金の原則と母性及び幼年労働者保護の原則に基づいて、婦女働法を制定する

乙　行政部門

一　真剣に女子教育を向上させる

二　労働者、農民女性の教育に留意する

三　各行政機関を開放し、女性を受け入れて職員とする。

四　各職業機関を女性に開放する

五　託児所を開設する

この決議案は中国の婦人運動に画期的な成果をもたらしました。その後分裂した国共

両党に伝統的な父権家族改革の課題を義務付けることになりました。

成瀬仁蔵の女子教育の精神が、その没後七年目に中国で開花したのです。その主導者がかつて二三年前に日本女子大の寮に住んでいた中国の女性留学生だとは成瀬先生は予測できたでしょうか。先生はいったん播いた思想の種は必ず開花すると堅く信じていたでしょう。先生の絶筆である「徳不孤、必有隣」（徳は孤ならず、必ず隣あり）はその証拠です。

何香凝の家族改革論の影響

何香凝の提出した家族改革論は進んだ理論で、後に中国共産党の一九三〇年代の婚姻制度の規定に影響がありました。たとえば、封建婚姻の解除、売買婚の禁止、童養嫁の排除、結婚離婚の自由などのスローガンを提出し、婚姻制度では婚姻の自由原則を提唱し、一夫一妻制を実行し、離婚後の財産、生活費などの問題で女性を保護しました。一九三九年四月公布された『陝甘寧辺区婚姻条例』なども婚姻民主の精神を貫きました。

蔣介石国民政府の一九三〇年代の『民法』に対しても影響がありました。それは民商法合一主義をとり、商法典を作らないのはこの民法典の特徴です。また、いち早く男女平等の原則、権力濫用の禁止の法理を導入しています。これは国民党蔣介石の一〇年間

の近代化の産物でした。今日台湾に限って引き続き効力を有するのです。

国民政府は、家族制度の上では清王朝体制との絶縁を明確にしました。一九三一年に実施された民法の親族・相続両篇では宗族継承の規定をなくし、遺産継承権を男女平等としたほか、父母の主婚権や教令権も制限し、家長は家族間の推挙によるとされるなど家族制度上の大改革が行われました。例を上げると、当事者双方の合意による結婚の締結および相互の同意による離婚が認められるようになりました（九七二条、一〇四九条）。一九二九年四月二七日の司法院の正式規定では、女子は嫁いだかどうかを問わず男子と同じ財産継承権を有すること、になりました。一九三〇年民法第五編継承編一一四四条規定によれば、配偶者はお互いに遺産を継承する権利を有すること、嫁いだ娘とまだ結婚していない娘は法律上男子と同等な継承する権利を有すること、以上が一九三一年五月五日正式に施行されました。これらはあくまでも都市部に止まって農村ではあまり知られていなかったのです。

現在への影響として一例を挙げてみると、たとえば結婚、離婚の自由は、つい最近の二〇〇三年八月十八日、婚姻登録条例を公表してやっと実現しました。

結婚、離婚は職場の証明書が要らない。結婚する場合、双方単身、非近親である声明書に署名すればよい

離婚する場合、離婚登録は即時完了（今まではかなり時間がかかった）
離婚も単位（職場）の紹介状や組織の同意などは不要である
結婚・離婚の自由の実現は、何香凝の提出した家族改革論より四分の三世紀の時間が過ぎていました。

4）実業教育を起こす

何香凝は、日本の教育の発展に感心して、また成瀬仁蔵の女子教育への熱心さに感銘を受けての帰国後、絶え間なく教育の発展に努めました。

成瀬の『女子教育』の第五章「実業教育」では、実業教育は知育と結びついた手工教育を行うことで、女子労働の見直しと社会に対する義務、国家に尽くす責任ある女子をそだてうる、と述べています。

その精神に感化され、何香凝は一九二四年、女性の文化水準を高めるために広州で三つ婦女労働者学校を創立すると提案し、これを国民党婦女部が決議しました。五〇〇名の女工が募集されました。十月廖仲凱の協力を得て、広州女子美術研究所を組織しました。一九二五年には広東の順徳県で二箇所の女工補習学校を設立しました。

何香凝はまた女性運動の人材を育てました。一九二六年九月十五日、広州で国民党中

央婦女運動講習所を設立し所長に就任いたしました。蔡暢が教務主任を担当しました。各省から婦女運動の幹部九〇人を募集しました。さらに何香凝の主管のもとで婦女運動人員講習所を創設して女性運動の幹部を育てました。

一九二五年八月二五日、夫の廖仲凱が暗殺されたあと、何香凝は労農扶助方針を貫くために、また廖仲凱が一生労農を愛護したことと、その労農扶助の意志を記念するために、一九二五年十月十五日、国民党中央執行委員会第一一七次会議で仲凱農工学校案を提出し採択されました。

この学校を創立するために、主任の何香凝は設置の地や資金募集、教職員を採用するなど、苦心して関係方面の人々をくりかえし訪問しました。そして自分の絵画を売って資金を集めました。学校の方針は養蚕、製糸分野の実務の教育です。この学校は今でも存続し優秀な人材を養成しました。これも成瀬の教育観を継承したものです。

5）成瀬校長の「信念徹底」精神の体現

成瀬仁蔵は学生たちに実践倫理の授業を行いました。日本女子大学の三綱領は成瀬の晩年に総括したものですが、「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」の精神は成瀬の一貫した思想です。何香凝はその点についてよく実践しました。

何香凝は同盟会結成時期からの長い活動歴を持つ国民党党員として、孫文一家と二〇年の付き合いがありました。孫文は彼女のことを日本語でおばさんと呼びました。一九二五年三月十二日孫文の死に際して、その遺言の証明者の一人となったこと、また孫文から特に夫人宋慶齢の後事を託されたことがその後の彼女の歩みに大きな影響を与えました。何香凝はその後、孫文の遺訓と遺志を継承することが自己の「歴史的使命」だと決意し[30]、終始、自分なりの道を歩みました。一九二〇年代、孫文の遺訓を実現するために、廖仲凱夫人として、国民党内に影響力を持ちました。彼女に対する蔣介石や汪精衛の協力の要請に不協力の態度をとっていたのは蔣介石が孫文の遺訓を裏切ったからです。

しかし国民革命も一九二七年、蔣介石の四・一二クーデターによって崩壊し、一、〇〇〇名以上の共産党の婦人活動家が虐殺されました。このときはさしもの何香凝も挫折に泣きました。勝気な性格は彼女を再び奮い立たせました。国民党での職をすべて捨てて彼女は国民党中央から離脱し、共産党の労農運動指導上での「過火」に対する批判的態度を明らかにして、子供が留学しているフランスにわたり、満州事変勃発を契機に一九三一年十一月に帰国しました。蔣介石が抗日に立ち上がろうとしないと知ると、彼女は蔣介石を諷刺して詩を作りました。

まげてみずから男児と称し、甘んじて敵人の気を受け、
戦わずして山河を贈るは万世羞恥を同じうす。
我ら婦女たち、願わくは砂場に往きて死せん
わがスカートをもってきみが軍服に換えていかん。

帰国後は抗日民主運動を経て、一九四〇年後半に中国国民党民主促進会、中国国民党革命委員会を設立し、民主党派の指導者の一人としての道を歩んでいきました。

5　成瀬仁蔵とインド

成瀬仁蔵はまたインドと連帯して、インド女子大学の成立にも貢献しました。

インド女子大学の創立者ドーンド・ケシャウ・カルウェ（Dhondo Keshav Karve, 一八五八―一九六二）はインドのカーストの最上位であるバラモン（司祭階層）の家に生まれ、早くから女性解放の願いをいだき、インド女性の地位に根本的に関わる寡婦再婚問題に取り組み、寡婦および一般女子のための教育活動に身を挺していきます。社会や国を改善するには「教育以外に問題の根本解決はない」と考え、女子高等教育の必要性

を痛感していました。

カルウェには未知の人から日本女子大学に関する冊子が贈られていました。送り主は二人で、一九一五年日本に行った時日本女子大を訪ね感銘し、半ダース買い求めたもので、カルウェが手にしたのはその内の一冊です。彼の自叙伝『回想』(Looking Back)にはこれについて次のように記していました。「私はこの冊子を思い出した。頁を追って読み進み、雷に打たれでもしたように感じた。新しい生命の躍動を覚えた。この冊子は日本女子大学を説明したものであった。成瀬氏、夢想家、そして一九〇〇年におけるその大学の創設者は偉業を成し遂げた。この冊子はその記述であり、一九一二年までの経過であった。インドの条件に合う大学を導入するに当たって、私はわが日本の兄弟の足跡を辿るべきであると考えはじめた[31]」

女子高等教育にとって「最寒時代」に日本女子大学校の歴史を語ると同時に将来の抱負を述べた著書を英語版としても出版されたことは注目されなければなりません。そこには目をアジア、世界に向けることを忘れていない成瀬がいます。日本女子大学校の教育理念とその具体化を述べたこの英文冊子の果たした、日本からアジアへの発信は例の新渡戸稲造の『武士道』(一八九九年)や岡倉天心の『東洋の理念』(一九〇二年)を想起させるといってもあながち過言ではないでしょう。

一九一五年末、ボンベイで開催された全国社会会議の議長を担当したカルウェは基調演説の中で随所にこの成瀬の英文冊子を引用して自分が創設しようとする女子大学の構想を語りました。カルウェは英文冊子の建学の精神にインスパイアーされ、インドにもこのような女子大をと志し、日本女子大の名称にならって、インド女子大と命名する学校を創立したのです。そして、カルウェがインド女子大を創設した一九一六年に、ラビンドラナート・タゴールは来日して成瀬と直接触れあい共感を深めることになり、そこには東洋とのさまざまな縁が思われます。[30]

タゴールの来日

タゴールは一八六一年生まれ、インド出身の詩人、劇作家、評論家として知られ、母国で小規模の学校を運営し、教育にあたりました。一九一三年のノーベル文学賞をアジアの人として初めて受賞しました。

一九一六年来日したタゴールは、各地における講演で、西洋文明の単なる模倣に疑問を投げかけ、人間的価値の忘却と権力欲や国家の集団的エゴイズムへの盲目的崇拝の現状に警告を発します。彼は思想や行動の自由についてすべてヨーロッパに指導を仰ぐことはない、とアジアからの対等の主張をいたしました。

成瀬はかねてタゴールの著作に親しみ、東京大学、慶応大学で行われた彼の講演を聴き、成瀬が渋沢栄一等と共に設立した「帰一協会」の思想運動とも共鳴する、人類の共存というメッセージとして受けとめ、日本女子大学校にもタゴールを招きました。

成瀬はその後もタゴールと語り、その人格に共鳴するものを感じ、「東洋の歴史が、物質万能主義や形式的教育を亡びさせ、世界を変革し得る」ことに同感しました。さらに八月半ば軽井沢に招かれたタゴールは、講演と瞑想の指導を日本女子大学校三泉寮の学生に行いました。

タゴールは「今回の日本訪問の真の目的は人心の知合を求めるためである。神は婦人に愛と美を授けた。ゆえに婦人の貢献すべき時がくるであろう」と語りました。タゴールの哲学は瞑想をし、詩人の直感を通して、宇宙的な哲理を基本として神と人間との霊的交流、調和合一を説き、そこに表れる善と愛とに偉大な力を見ました。成瀬とタゴールの出会いはその思想の同調者として確信と信頼を相互に得たといえるでしょう。

タゴール記念会『タゴールと日本』によれば、タゴールは軽井沢の自然の中に身をおき、霊感に燃え、生の実現と宗教的感性があふれたのです。成瀬がなくなってから四回にわたる来日のときにも日本女子大学校を訪れ、講演を行っています。軽井沢での滞在を記念して、このとき以来タゴールと交流を続けた高良（和田）とみが代表者となって、

碓氷峠にタゴールの記念碑「非戦」が建てられました。[33] その高良とみは、非戦精神の実践者として戦後の中日関係に貢献した人で、初めて中華人民共和国を訪れた日本人です。

6　今を生きる成瀬仁蔵

成瀬仁蔵の生涯の特色はいくつかの良き「時」に会ったことです。第一の時は明治維新であり、第二の時はキリスト教との出合いでありました。第三の時は米国留学です。第四の日本女子大学校の創設は、女子教育に政策としても理解を見せ始める時期でありました。[34]

成瀬の個の人格形成を核とする人間観なり、社会観は日本近代社会を形成する過程では少数派であり、異質なものであったといえます。資本主義経済を導入し、立憲君主制（天皇制国家）を形成し、家父長制の色濃い民法の下で、女性に対しては良妻賢母の教育を浸透させていく日本の近代社会の現実との差異は大きなものがありました。[35]

しかし、成瀬のアジア全体への視野と人間存在への深い関心は魅力あるものでした。その教え子である中国の何香凝は成瀬の思想に啓発され、中国の家族改革を促しました。何香凝の息子の廖承志は長い間中日友好協会会長をつとめ、中日関係に貢献しました。

また教え子の高良とみは日本と中国の戦後の友好に貢献し、平和や人類の課題の解決の目標への成瀬先生の理想を受けついだのです。

注

1 実藤恵秀『中国人日本留学史』くろしお出版、一九六〇年、六〇頁
2 「中国人民の日本観」中国社会科学研究会第一三届年会特別講演稿　中央テレビ局　二〇〇三年九月一三日
3 成瀬仁蔵「新婦人訓」『成瀬仁蔵著作集』第三巻　日本女子大学、一九八一年、三五九頁
4 中嶌邦『成瀬仁蔵』人物叢書　新装版　吉川弘文館、二〇〇二年、三〇頁
5 同右、三三頁
6 青木生子『いまを生きる成瀬仁蔵』講談社、二〇〇一年、四三頁
7 中嶌邦、前掲書、四〇―四一頁
8 中嶌邦、前掲書、四二頁
9 中嶌邦、前掲書、六六頁
10 中嶌邦、前掲書、一三八頁
11 中嶌邦、前掲書、八七―八八頁
小島蓉子「日・米女子大学教育の比較」日本女子大学女子教育研究所編『女子の高等教育』ぎょうせい、一九八七年、参照
12 富永健一『社会学講義―人と社会の学』中公新書、一九九五年、一四七―一四九頁

13 富永健一、前掲書、一五〇頁
14 富永健一、前掲書、一五一頁
15 瀬地山角『東アジアの家父長制』勁草書房、一九九六年、八六頁
16 瀬地山角、前掲書、一二〇頁
17 瀬地山角、前掲書、八八—八九頁
18 瀬地山角、前掲書、八九頁
19 西川祐子『近代国家と家族モデル』吉川弘文館、二〇〇〇年、一三頁
20 山田昌弘『近代家族のゆくえ』新曜社　一九九四年
21 Code Napoleon　民法・商法・民事訴訟法・刑法・刑事訴訟法に関するナポレオン一世制定の法典
22 布川清司『近代日本女性倫理思想の流れ』大月書店　二〇〇〇年
23 中嶌邦、前掲書、一〇二頁
24 『毛沢東書信選集』人民出版社、一九八三年、一〇六頁
25 何香凝「私の思い出」『人民日報』一九六一年一〇月六、七日
26 何香凝『江蘇』一九〇三年第四期、東京　一九〇三年六月二五日。尚明軒、余炎光編『双清文集』下巻、人民出版社、一九八五年、一—二頁
27 何香凝『宇宙風』五一期、一九三七年一一月一一日。『双清文集』、一九二頁
28 同右
29 『上海民国日報』一九二四年三月一二日

30 何香凝「改組国民党的前後回億」一九四一年六月。『双清文集』下巻、三六二頁
31 青木生子『いまを生きる成瀬仁蔵』講談社、二〇〇一年、二二八—二二九頁
32 同右、二二九頁
33 中嶌邦、前掲書、二〇八—二一〇頁
34 同右、二三三—二三五頁
35 同右、二三九—二四〇頁

発表を終えて

外国人研究員として、日文研フォーラムでの話を依頼されたとき、明治教育家、成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—を取り上げることにしました。

2003年８月19日～21日、軽井沢で開催された文明研究プロジェクト夏期研究集会「日本における近代文明—その精神的担い手たち」で、私は成瀬仁蔵、内村鑑三、そして宮沢賢治について短い発表をしました。成瀬仁蔵はまさに日本近代文明の精神的担い手として活躍した人物だと私は思います。集会の後、一同は「三泉寮」を見学しました。

11月11日、フォーラムで大勢の人々の前で自分の関心のある問題について発表したとき、京都にいる日本女子大学の同窓会の方々も出席して録音されていました。また、笠谷和比古先生のような著名な学者のコメントを拝聴することで、私のこれからの研究について必要とされる視点を得ることができました。

発表にあたって、小野和子様、研究協力課の方々に並々ならぬお世話になりました。感謝の意を表します。

のんびりとした京都の春が来て、私の一年間の日文研での生活がいよいよ終わります。滞在中暖かくご教示を賜りました鈴木貞美、稲賀繁美、劉建輝の諸先生に厚くお礼申し上げます。

2004年２月20日

陳 暉

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ Alessandro VALOTA（ピサ大学助教授） 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11	エンゲルベルト・ヨリッセン Engelbert JORIβEN（日文研客員助教授） 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー　A.トンプソン Lee A. THOMPSON（大阪大学助手） 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19	フォスコ・マライーニ Fosco MARAINI（日文研客員教授） 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14	SONG　Whi Chil 宋　彙七（慶北大学校師範大学副教授） 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9	セップ・リンハルト Sepp LINHART（ウィーン大学教授） 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11	スーザン J. ネイピア Susan J. NAPIER（テキサス大学助教授） 「近代日本小説における女性像—現実と幻想」
⑧	63.12.13	ジェームズ C. ドビンズ James C. DOBBINS（オベリン大学助教授） 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡」
⑨	元. 2.14 (1989)	YAN　An Sheng 厳　安生（北京外国語学院日本語学部助教授） 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11	LIU　Jingwen 劉　敬文（遼寧大学日本研究所副所長） 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9	スザンヌ・ゲイ Suzanne GAY（オベリン大学助教授） 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13	HSIA　Gang 夏　剛（京都工芸繊維大学助教授） 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに—」

⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント Ernst LOKOWANDT（東洋大学助教授） 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8	キム・レーホ KIM Rekho（ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授） 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12	ハルトムート O. ローターモンド Hartmut O. ROTERMUND（フランス国立高等研究院教授） 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3	WANG Xiang-rong 汪　向榮（中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授） 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14	ジェフリー・ブロードベント Jeffrey BROADBENT（ミネソタ大学助教授） 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」
⑱	元.12.12	エリック・セズレ Eric SEIZELET（フランス国立科学研究所助教授） 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ Sumie JONES（インディアナ大学準教授） 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13	カール・ベッカー Carl BECKER（筑波大学哲学思想学系外国人教師） 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10	グラント K. グッドマン Grant K. GOODMAN（カンザス大学教授・日文研客員教授） 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8	イアン・ヒデオ・リービ Ian Hideo LEVY （スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授） 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12	リヴィア・モネ Livia MONNET（ミネソタ州立大学助教授） 「村上春樹：神話の解体」
㉔	2. 7.10	LI Guodong 李　国棟（北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師） 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉕	2. 9.11	MA Xing-guo 馬　興国（遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授） 「正月の風俗—中国と日本」
㉖	2.10. 9	ケネス・クラフト Kenneth KRAFT（リーハイ大学助教授） 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ Ahmed M. FATTHY（カイロ大学講師） 「義経文学とエジプトのベーバルス王伝説における主従関係の比較」
㉘	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ Karel FIALA（カレル大学日本学科長・日文研客員助教授） 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
㉙	3. 2.12	アレクサンドル A. ドーリン Aleksandr A. DOLIN （ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員） 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5	ウィーベ P. カウテルト Wybe P. KUITERT（ワーゲニンゲン大学研究員） 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
㉛	3. 4. 9	ミコワイ・メラノビッチ Mikołaj MELANOWICZ （ワルシャワ大学教授・日文研客員教授） 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー Beatrice M. BODART-BAILEY （オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授） 「三百年前の京都—ケンペルの上洛記録」
㉝	3. 6.11	サトヤ B. ワルマ Satya B. VERMA （ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授） 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9	ユルゲン・ベルント Jürgen BERNDT（フンボルト大学教授・日文研客員教授） 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」
㉟	3. 9.10	ドナルド M. シーキンス Donald M. SEEKINS（琉球大学助教授） 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
㊱	3.10. 8	WANG Xiao Ping 王　曉平（天津師範大学助教授・日文研客員助教授） 「中国詩歌における日本人のイメージ」
㊲	3.11.12	SHIN Yong-tae 辛　容泰（東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員） 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」

㊳	3.12.10 (1991)	HONG YoonSik 洪　潤植（東国大学校教授） 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
㊴	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン Savitri VISHWANATHAN（デリー大学教授・日文研客員教授） 「インドは日本から遠い国か？―第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷―」
40	4. 3.10	ジャン＝ジャック・オリガス Jean-Jacques ORIGAS（フランス国立東洋言語文化研究所教授） 「正岡子規と明治の随筆」
㊶	4. 4.14	リブシェ・ボハーチコヴァー Libuše BOHAČKOVÁ （プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授） 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12	ポール・マッカーシー Paul McCARTHY（駿河台大学教授） 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」
43	4. 6. 9	G．カメロン・ハーストⅢ G. Cameron HURST Ⅲ（ニューヨーク市立大学リーマン広島 校学長・カンザス大学東アジア研究所長） 「兵法から武芸へ―徳川時代における武芸の発達―」
44	4. 7.14	Yoshio SUGIMOTO 杉本　良夫（ラトローブ大学教授） 「オーストラリアから見た日本社会」
㊺	4. 9. 8	WANG Yong 王　勇 （杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授） 「中国における聖徳太子」
㊻	4.10.13	LEE Young Gu 李　栄九（大韓民国中央大学教授・日文研客員教授） 「直観と芭蕉の俳句」
㊼	4.11.10	ウィリアム D．ジョンストン William D. JOHNSTON （ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授） 「日本疾病史考―『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
㊽	4.12. 8	マノジュ L．シュレスタ Manoj L. SHRESTHA（甲南大学経営学部講師） 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ―技術移転をめぐって―」

㊾	5. 1.12 (1993)	PARK Jung-Wei 朴　正義（圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員） 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9	マーティン・コルカット Martin COLLCUTT （プリンストン大学教授・日文研客員教授） 「伝説と歴史の間―北條政子と宗教」
㊿	5. 3. 9	Yoshiaki SHIMIZU 清水　義明（プリンストン大学マーカンド栄誉教授） 「チャールズ L. フリアー（1854～1919）とフリアー美術館 ―米国の日本美術コレクションの一例として―」
52	5. 4.13	KIM Choon Mie 金　春美（高麗大学校教授・日文研来訪研究員） 「日本近代知識人の思想と実践―有島武郎の場合―」
53	5. 5.11	タキエ・スギヤマ・リブラ Takie SUGIYAMA LEBRA（ハワイ大学教授） 「皇太子妃選択の象徴性 ―旧身分文化との関連を中心として―」
54	5. 6. 8	H. W. KANG 姜　希雄（ハワイ大学教授・日文研客員教授） 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 ―科挙制度をめぐって―」
55	5. 7.13	ツベタナ・クリステワ Tzvetana KRISTEVA（ソフィア大学教授・日文研客員教授） 「涙の語り―平安朝文学の特質―」
56	5. 9.14	KIM Yong-Woon 金　容雲（漢陽大学教授・日文研客員教授） 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
57	5.10.12	オロフ G. リディン Olof G. LIDIN（コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授） 「徳川時代思想における荻生徂徠」
58	5.11. 9	マヤ・ミルシンスキー Maja MILČINSKI （スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授） 「無常観の東西比較」
59	5.12.14	ウィリー・ヴァンドゥワラ Willy VANDEWALLE （ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授） 「日本・ベルギー文化交流史―南蛮美術から洋学まで―」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン J. Martin HOLMAN（ミシガン州立大学連合日本センター所長） 「自然と偽作―井上靖文学における『陰謀』―」

61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモア Maya GERASIMOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8	オギュスタン・ベルク Augustin BERQUE (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12	リチャード・トランス Richard TORRANCE (オハイオ州立大学助教授) 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880〜1930」
64	6. 5.10	シルバーノ D. マヒウォ Sylvano D. MAHIWO (フィリピン大学アジアセンター準教授) 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14	LIU Jian Hui 劉　建輝 (南開大学副教授・日文研客員助教授) 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12	チャールズ J. クイン Charles J. QUINN (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」
67	6. 9.13	フランソワ・マセ François MACÉ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥⑧	6.11.15	JIA Hui-xuan 賈　蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20	PENG Fei 彭　飛 (日本学術振興会特別研究員) 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦⓪	7. 1.10 (1995)	ミハイル V. ウスペンスキー Michail V. USPENSKY (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) 「根付—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心に—」
⑦①	7. 2.14	YAN Shao Dang 厳　紹璗(北京大学教授・日文研客員教授) 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのかかわり—」

⑫	7. 3.14 (1995)	WANG Jiahua 王　家驊（南開大学教授・日文研客員教授） 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑬	7. 4.11	アリソン・トキタ Alison TOKITA （モナシュ大学助教授・日文研客員助教授） 「日本伝統音楽における語り物の系譜—旋律型を中心に—」
⑭	7. 5. 9	リュドミーラ・エルマコーワ Lioudmila ERMAKOVA （ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長） 「和歌の起源—神話と歴史—」
75	7. 6. 6	パトリシア・フィスター Patricia FISTER（日文研客員助教授） 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25	CHOI Kil-Sung 崔　吉城（広島大学総合科学部教授） 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑰	7. 9.26	SU Dechang 蘇　徳昌（奈良大学教養部教授） 「日中の敬語表現」
⑱	7.10.17	LI Jun Yang 李　均洋（西北大学副教授・日文研来訪研究員） 「雷神思想の源流と展開—日・中比較文化考—」
79	7.11.28	ウィリアム・サモニデス William SAMONIDES （カンザス大学助教授・日文研客員助教授） 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑳	7.12.19	タチヤーナ L. ソコロワ=デリューシナ Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA （翻訳家・日文研来訪研究員） 「俳句の国際性—西欧の俳句についての一考察—」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク John CLARK（シドニー大学助教授・日文研客員助教授） 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」
㉒	8. 2.13	ジェイ・ルービン Jay RUBIN（ハーバード大学教授・日文研客員教授） 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12	イザベル・シャリエ Isabelle CHARRIER（神戸大学国際文化学部外国人教師） 「日本近代美術史の成立—近代批評における新語—」

⑧④	8. 4.16 (1996)	リース・モートン Leith MORTON (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧⑤	8. 5.28	マーク・コウディ・ポールトン Mark Cody POULTON (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) 「能における『草木成仏』の意味」
⑧⑥	8. 6.11	フランシスコ・ハビエル・タブレロ Francisco Javier TABLERO (慶應義塾大学訪問講師) 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30	シルヴァン・ギニヤール Silvain GUIGNARD (大阪学院大学助教授) 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10	ハーバートE.プルチョウ Herbert E. PLUTSCHOW (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) 「怨霊の領域」
⑧⑨	8.10. 1	WANG Xiu-wen 王　秀文 (東北民族学院助教授・日文研客員助教授) 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」
90	8.11.26	WANG Bao Ping 王　宝平 (杭州大学日本文化研究所副所長・日文研客員助教授) 「明治期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨①	8.12.17	CHEN Shen Bao 陳　生保 (上海外国語大学教授・日文研客員教授) 「中国語の中の日本語」
⑨②	9. 1.21 (1997)	アレキサンダーN.メシェリヤコフ Alexander N. MESHCHERYAKOV (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪研究員) 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18	KWAK Young-Cheol 郭　永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) 「言語から見た日本」
⑨④	9. 3.18	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL (スペイン・マドリード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) 「弁当と日本文化」

⑨⑤	9. 4.15 (1997)	Michele F. MARRA（ミケーレ F. マルラ）（カリフォルニア大学ロサンゼルス校準教授・日文研客員助教授） 「弱き思惟—解釈学の未来を見ながら」
⑨⑥	9. 5.13	Dennis HIROTA（デニス・ヒロタ）（京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家　バークレー仏教研究所準教授） 「日本浄土思想と言葉 —なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨⑦	9. 6.10	Jan SÝKORA（ヤン・シコラ） （チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授） 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」
98	9. 7. 8	Kinya TSURUTA 鶴田　欣也 （ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） 「向こう側の文学—近代からの再生—」
⑨⑨	9. 9. 9	Pauline KENT（ポーリン・ケント）（龍谷大学助教授） 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14	Theodore William GOOSSEN（セオドア・ウィリアム・グーセン） （ヨーク大学準教授・日文研客員助教授） 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
⑩①	9.11.11	KIM Uchang 金　禹昌（高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授） Livia MONNET（リヴィア・モネ） （モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） Carl MOSK（カール・モスク）（ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授） Jan SYKORA（ヤン・シコラ）（カレル大学助教授・日文研客員助教授） Kinya TSURUTA 鶴田　欣也 （ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
⑩②	9.12. 9	Jonah SALZ（ジョナ・サルズ）（龍谷大学助教授） 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	KANG Shin-pyo 姜　信杓 （仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授） 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

⑯	10. 2.10 (1998)	GAO Wenhan 高　文漢（山東大学教授・日文研客員教授） 「中世禅林の異端者――休宗純とその文学」
105	10. 3. 3	シュテファン・カイザー Stefan KAISER（筑波大学教授） 「和魂漢才、和魂洋才―語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7	スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES （インディアナ大学教授・日文研客員教授） 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19	リヴィア・モネ Livia MONNET （モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） 「映画と文学の間に―金井美恵子の小説における映画的身体」
⑱	10. 6. 9	Hiroshi SHIMAZAKI 島崎　博（レスブリッジ大学教授・日文研客員教授） 「化粧の文化地理」
⑲	10. 7.14	Peipei QIU 丘　培培（バッサー大学助教授・日文研来訪研究員） 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ―詩的イメージとしての典故―」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER（チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授） 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA （カイロ大学講師・日文研客員助教授） 「『愛玩』―安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑫	10.11.10	アリソン・　トキタ Alison McQUEEN-TOKITA （モナシュ大学助教授・日文研客員助教授） 「『道行き』と日本文化―芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK （シェフィールド大学教授・東京大学客員教授） 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑭	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜　勤 （華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第２学部副学部長・日文研客員助教授） 「『中』のシンボリズムについて―宇宙論からのアプローチ」

115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑯	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑰	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑱	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金　知見（韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授） 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑳	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子　滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコンサルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
㉑	11. 9. 7	SONG Min 宋　敏（韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授） 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
㉒	11.10.12	ジャン-ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
㉓	11.11.16	ヴラディスラブ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリャード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
㉔	11.12.14	X. Jie YANG 楊　暁捷（カルガリー大学準教授・日文研客員助教授） 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

⑫⑤	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA（日文研中核的研究機関研究員） 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑥	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李　応寿（世宗大学校副教授・日文研客員助教授） 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレーンハルト Anna Maria THRÄNHARDT （デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授） 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN （ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授） 「アジアの西の境」
⑫⑨	12. 5. 9	KIM Jeong Rye 金　貞禮（国立全南大学校副教授・日文研客員助教授） 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⓪	12. 6.13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD （県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授） 「出島—長崎—日本—世界　憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン（1867—1944）と倉場富三郎（1871—1945）」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH （ソフィア大学助教授・日文研客員助教授） 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬②	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI（日文研外来研究員） 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER （インディアナ大学教授・日文研客員教授） 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬④	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛　容泰 （東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授） 「日本語の『カゲ（光・蔭）』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡　敦達 （同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授） 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」

⑬⑥	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS（日文研中核的研究機関研究員） 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER （ヴァージニア大学教授・日文研客員教授） 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑧	13. 4.10	LI Zhuo 李　卓（南開大学教授・日文研客員教授） 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY （フランクフルト大学教授・日文研客員教授） 「西洋における俳句の新しい受容へ」
⑭⓪	13. 6.12	XU Subin 徐　蘇斌（日文研外国人研究員） 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II （コロンビア大学教授　日文研外国人研究員） 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭②	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE（日文研外来研究員） 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN （ハワイ大学準教授・日文研客員助教授） 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官　文娜（日文研外国人研究員） 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ キムラ スティーブン Chigusa KIMURA-STEVEN （ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員） 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭⑥	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申　昌浩（日文研中核的研究機関研究員） 「親日仏教と韓国社会」

⑭⑦	14. 2.12 (2002)	マシミリアーノ　トマシ Massimiliano TOMASI （ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員） 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭　惠卿 （世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員） 「日韓言語文化の比較―語る文化と語らぬ文化―」
149	14. 4. 9	マッシュー　フィリップ　マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY （ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員） 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法―三条本を中心に―」
150	14. 5.14	LEE　Kwang Joon 李　光濬 （東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員） 「禅心理学的生命観」
⑮①	14. 6.11	LU　Yi 魯　義 （中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員） 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア　ボロ Alexia BORO （イタリア　カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員） 「建物と権力―明治初期の東京の建築について」
153	14. 9.10	YEE　Milim 李　美林 （日文研外国人研究員） 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴―日韓比較―」
154	14.10. 8	マルクス　リュッターマン Markus RÜTTERMANN （日文研外国人研究員） 「伝授から伝統へ―中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑮⑤	14.11. 5	KIM　Moon Gil 金　文吉 （韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員） 「神代文字と日本キリスト教―国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS （米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員） 「問題化された身体―明治時代における医学と文化」

157	15. 1.14 (2003)	デビット L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊仇討ち一件顚末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦　暁梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」
⑯⓪	15. 4. 8	ビル スウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴　銓烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林　容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツィゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
⑯⑤	15.10.14	WANG Cheng 王　成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
⑯⑥	15.11.11	CHEN Hui 陳　暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家　成瀬仁蔵のアジアへの影響－家族改革をめぐって－」

167	15.12. 9 (2003)	エフゲーニー S. バクシェエフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所　沖縄県宮古諸島の聖地・場所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔　周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
169	16. 5.11 (2004)	コンスタンティン ノミコス ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」
170	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王　述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
171	16. 7.13 (2004)	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リビン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm

＊＊＊＊＊＊＊

発 行 日　2004年 9 月30日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話（075）335-2048
ホームページ：http://www.nichibun.ac.jp

＊＊＊＊＊＊＊
© 2004　国際日本文化研究センター

■ 日時

2003年11月11日（火）

午後１時～３時

■ 会場

キャンパスプラザ京都

第一六六回　明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響 ―家族改革をめぐって―

陳　暉

国際日本文化研究センター